

私は月がいい

白百合学園高等学校 二年 今村 結

私には二歳年上の姉がいる。歳も近いせいか、小さい時はいつも一緒に過ごしていた。姉は、元気いっぱいで明るくて、声も大きくて、姉のいる所はどこでも一瞬でぱっと明るくなる、まさに太陽のような存在。姉がいると家族や友人はみんな笑顔になつておしゃべりが止まらなかつた。

私は幼いながらに、いつも姉をうらやましく思つていた。私も姉のようにいつも元気に明るくお話ができるたら、どんなによいだろうと思つていた。幸い、今まで人から姉のように明るくなりなさいなどと指摘をされたことはなかつた。ただ自分で、姉のようになれたらと思つていた。

ところが、ある日、姉はいつもと違つた様子で私に話しかけてきたことがある。

「結ちゃん、いつもありがとうね。私は結ちゃんが私の話を真剣に聞いてくれるから、自分の言いたい事が言えるの。結ちゃんがいるから、明るく元氣でいられるの。」と。私は姉からこんなことを言われるなんて思つてもみなかつたので、とても驚いた。姉は話をする時に、人一倍気を遣つていたことを初めて知つた。私は自分が姉の支えになつていることを知り、とても嬉しかつた。

また、私がアメリカに住んでいた時に、私は母に相談したことがあつた。

「ママ、どうして咲ちゃんと私はママの娘なのに、こんなに性格が違うの？私は咲ちゃんみたいに明るく元気な女の子になりたいよ。」

と。母はすぐにつもの調子で、

「えー、ママは一度もそんな風に思つたことはないよ。咲ちゃんは太陽のようで、結ちゃんは月みたいで、ママにとつては二人とも同じくらい大事な存在だからね。太陽のように元気いっぱいの咲ちゃんも大好きだし、月のように優しく穏やかにママの話を聞いてくれる結ちゃんも大好きだからね。結ちゃんは今まで素敵だよ。」と言つてくれた。私は母に月みたいと言つられてから、月に興味をもつようになつた。お月見やふと学校や塾の帰りにも月を眺めるようになつた。

月とは、辞書によると、地球の衛星である天体。太陽の反射光を投げかける。満ち欠けを繰り返すことから、物事の移り変わりや変化を象徴することもあると書かれ

ていた。

私はアメリカの友人と別々になつても、見える月は同じだから、寂しくなつたら空を見ようねと約束をした。だから帰国をして初めてのお誕生日に、父に天体望遠鏡をおねだりして買ってもらつた。月は確かに、毎日同じ姿の日はない。自分が動くとどこまでもついてきてくれた。

アメリカでは、月の模様は女性の横顔に見えると言つていた。日本では、うさぎがもちつきをしている姿に見えると絵本や親から聞いていたので、望遠鏡で何度も月を観察して、家族を巻き込んで写真を撮つたことは、今となつてはよい思い出である。

私は帰国をして日本での生活が長くなり、自分も成長したこともあり、小さい頃よりも明るく元気な性格になりたいと思わなくなつた。学校生活においても、クラス委員や生徒会などを担つてくれる明るく活発な友人を尊敬しているが、やはり自分は表の仕事より裏方の仕事の方が好きである。

あの時、姉の本音が聞けて、母から月のような存在と言われて、自分は自分のままでいいと思えたのだ。母は、私たち姉妹は歳が近いので、比較されやすいことを意識して、今まで私たちを比べることは一度もなかつた。

私は高校生になつた今、改めて月のような人になりたいと思つてゐる。もちろん、姉のような明るくてコミュニケーション力が高くて誰とでもすぐに打ち解ける人に憧れる。しかし、私は気づいたのだ。太陽だけがその場を照らしているわけではない。ちょうどいいところで相槌を打つたり、ちょっとした話にもリアクションを返したりして、目立たないけれどもその場を支えている月のような人もいる。背伸びをして無理して太陽になろうとするより、太陽と同じように誰かにとつて支えになつてゐる存在、少し心細い夜の時間に励ましてくれる月のようになりたい。

私は、明るくて元気いっぱいの姉が大好きだ。姉は、自分が明るくいられるのは、私がいるからだと言つてくれた。私も姉がいるから、自分を客観的に見ることができ、おかげで、私は月のような存在でいいのだと思えるようになつた。

皆さんは、太陽と月のどちらが好きですか？私は自信を持って「月だ。」と答える。